

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書
「米国及び他国の薬剤師から学んだこと」

研修期間：平成 25 年 7 月 17 日～7 月 29 日
研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

080973223

河合由樹子

私は平成 25 年 7 月 17 日から 7 月 29 日までの 13 日間、アメリカのアラバマ州バーミングハム市にあるサンフォード大学薬学部及びその関連施設において海外臨床薬学研修に参加した。10 日間、現地の講義を受け研修先を訪問することで海外における薬学教育を実体験し、海外の教員及び薬学生と交流することで彼らの薬学に接する姿勢を感じる事ができた。

また、サンフォード大学では名城大学だけでなく各国の大学の薬学部と国際交流を行っており、今回の研修ではザンビア（アフリカ）及び中国の薬学部からの参加者もいた。他国からの参加者は私達のような学生・院生ではなく実際の臨床現場を経験してきた薬剤師であり、研修を共に行ったことで彼らから学ぶことも多くあった。ザンビアの薬剤師の方々は米国における感染症治療や薬学の教育制度に特に強く興味を持って研修に参加したとのことであった。また祖国では HIV が深刻な問題であるとの話も研修中に聞くことができた。中国の薬剤師の方々は、現在急速に中国で臨床薬学が発達しており、その臨床薬学の先進国であるアメリカにおける実態を学びたく研修に参加したとの話だった。各国の背景や文化を踏まえた上で、ディスカッションでは様々な意見を聞くことが出来、貴重な体験となった。

研修内容は、大学内にて講義を受け基本的な米国における薬学背景の知識を習得した後、2 日間関連施設を訪問し実際の臨床現場における薬剤師の働き、他の医療スタッフとの関わり及び患者への対応を学習した。

講義の内容は、「米国の講義方式の概要（ソクラテスマソッド）」「米国における薬学教育及びカリキュラム」「米国における薬学教員の実態」など米国における薬学制度についての講義から始まり、次に「他の医療スタッフとの関わり方」「臨床的意思決定」「社会包括制度」など、より臨床薬学に特化した内容を学び、研修の後半では薬学生による症例報告会や代表的な疾患（糖尿病、敗血症、甲状腺疾患、心疾患）の講義、疼痛コントロール、DI、老年医学、小児医学、薬物動態、抗凝固療法などの講義も含まれていた。

アメリカでは薬学カリキュラムの中に、1 年次から 3 年次における 300 時間の実習が組み込まれている。サンフォードでは 1 週間のうち 1 日を実習に割り当てた授業カリキュラムとなっていた。1 年次から一定の時間を実際の臨床現場で過ごすことで、早期から薬剤師の役割を認識することが出来るのではないかと、また、このことが米国の薬学生の薬剤師としての意識の高さへと繋がっているのではないかと感じた。また、私自身 5 年次の実習を経験したことで、大学での講義が実体験と重なりその重要性を認識することができた。常に大学の講義内容を実体験と重ね合わせながら学習できる教育制度は早期からこの気づきを与えることが出来るので、このことも米国の薬学生の意識の高さに繋がっていると感じた。最終学年である 4 年次には 8 施設（各施設 1 か月ごと）をまわり、1 年かけて計 1440 時間の実務実習を行う。また幅広い視野を広げるために、実習施設の中には病院や薬局だけに留まらず海外における研修も選択できるようになっていた。より多くの研修施設を回ることで多様な経験を積むことができ、また就職先を考える上で多くの選択肢を体験すること

が出来ると感じた。

今回の研修で訪問することが出来た関連施設は病院3施設 (St. Vincent' s Birmingham, St. Vincent' s East, Children' s Hospital of Alabama)、クリニック2施設 (Jefferson County Department of Health, Christ Health Center)、薬局1施設 (FMS Pharmacy) であった。私は Jefferson County Department of Health 及び FMS Pharmacy の2施設を訪問した。

Jefferson County Department of Health はバーミングハム市の中でも特に貧困層の住民が多く暮らしている地域の保健所である。日本の皆保険制度とは異なり、米国では保険が一つのビジネスであり様々な保険があるため、保険の有無や患者がどの保険に入っているかによって使用できる薬剤が異なるという問題がある。Jefferson County は保険未加入者の患者が多い地域であり、患者によっては薬を買うお金もまかなえない場合もあるとのことだった。サンフォードの学生はそこで医師の診察の補助や地域住民に対して糖尿病カウンセリング、禁煙カウンセリングを行っている。私は糖尿病カウンセリングを見学させて頂くことが出来た。施設を訪問してまず驚いたのが、レジデントを中心に主に学生主体で業務が行われているということだった。患者のカウンセリングは基本学生が一人で行い、薬の選択も学生が患者との相談の上、決定していた。患者カウンセリングは地域住民に配慮して行われており、糖尿病治療のインスリンは日本で主流のペンタイプではなく薬価の安いバイアルタイプが基本であった。血糖の自己測定も毎日行うことが金銭的に厳しいため、毎回カウンセリングの4日前から1日1回ずつ時間をずらして朝・昼・夕食後・就寝前と測定するように指導していた。地域住民の背景に合わせて工夫して指導を行っている姿勢が印象的であった。日本における実習でも患者面談や服薬指導など直接患者と対面する場面は多くあったが、指導薬剤師の目の届く範囲で実習を体験しているというイメージであった。学生主体で一人ひとりの患者に責任を持ちながら実習を行える環境は日本よりも進んでいるように感じた。しかし、保険の問題、貧困の問題など日本ではあまり問題とならない問題を目の当たりにし、日本の整った医療福祉制度に気づくことが出来た。

FMS Pharmacy は OTC や日用品も取り扱う日本におけるドラッグストアのような薬局である。ピッキングなどの主な調剤は基本的にテクニシャンと呼ばれる調剤専門職の人が行っており、薬剤師はカプセル剤の作成などの複雑な調剤や、処方箋監査、患者カウンセリングなどの業務を行っていた。役割が明確に分担されているため、薬剤師がより薬学的知識を必要とする業務に集中できる点が日本とは異なり良いと感じた。また米国の薬局において薬剤師が直接患者にワクチンや筋注剤を投与できるとのお話があった。米国のリフィル制度と合わせて、日本では病院の医師による診断を介する事柄を、より身近な薬局で行えることは時短、医療費の削減、患者の負担の削減へと繋がっていると感じた。

個人的に授業の中で印象的だった学生によるケースプレゼンテーションについて述べる。ケースプレゼンテーションでは、教員や質問者からの厳しい質問に対して学生がひるむことなく自信を持ってはきはきと回答していたことが印象的であった。またその発表内容も

pubmed上の文献など、根拠のある臨床試験結果からすべて導かれており学生がすべての臨床試験について細かいところまで深く読み込み考えていることが伝わってくる発表であった。私自身も病院実習中の症例報告会の時など、ガイドラインを勉強したことはあったが、そのガイドラインがどのような臨床試験結果から導き出されたものなのかなど、深いところまで検索することはなかったため、真のEBMのお手本を見せて頂くことが出来たと感じた。

この海外研修を通して感じたことは、米国の学生や他国の薬剤師の根拠のある自信と熱意である。米国でも他国においても薬剤師の臨床における立ち位置がどうあるべきかという問題は共通であった。今回の研修を通して米国の薬剤師の高い地位は、長い時間をかけて築き上げられたものであることを教えて頂いた。学生のころから意欲的に薬学に取り組み、自信を持って臨床の場で薬剤師として出来ることを多職種に示してきたから今の現状がある、と一人の先生が言っていたことが印象的であった。また他国の薬剤師とのディスカッションを通して彼らの薬剤師としての熱意を多いに感じる事が出来た。来年から薬剤師として社会に出ても、研修中に出会った人々を思い返し、彼らのように熱意と信念を持って働き続けて行きたいと思った。

最後に、今回このような有意義な研修を経験させて頂き関係者の方々に深く感謝致します。今回の研修で得たことを今後、社会に出て還元していけるような薬剤師を目指したいと思えます。